渡辺だいすけ 奔走記

県政報告

第9号
2021年7月
— 発行者 —
福井県議会議員
渡辺大輔
福井市新田塚1-70-31
TEL.0776-50-2083

議会答弁（一般質問 6月23日）　活動報告

★学校教職員のワクチン接種

現在ワクチン接種がすすんでいます。国は加速度的に国民へのワクチン接種を進めていますが、一時的に需要過多となり、自治体へのワクチン供給が不足する状態となっています。

ワクチン接種には副反応があり、特に若い方には副反応が表れやすく、2回目の接種後発熱を伴うなどで翌日に休養を要するケースも見られます。そこで接種を希望する学校教職員に対しては夏季休業中に行うことの提案をしました。夏季休業中も教職員は勤務日ですが、**授業に支障がない期間なので、例え副反応で接種後勤務できないとしても、子ども達への授業の進度等への影響は避けられます。**今後のワクチンの供給にもよりますが、接種を希望する学校教職員が全員、夏季休業中に接種を終えられるように提言しました。

A **【健康福祉部長】**接種主体は市町ですが、市町へのサポートも含めて、県営特設会場や巡回接種で行うなど、学校教職員に対して、夏季休業中を中心と考えています。

★若手職員による「チャレンジ政策提言」

民間会社では20代～30代の若手社員が、日頃自分が考えている企画やアイデアを直接社長にプレゼンすることは当たり前になっていますが、行政にもその手法を取り入れている福井県。「若手職員の意見を直接聞きたい、そしてその独創的なアイデアで政策の立案を」という、杉本知事の思いが制度化された若手職員による**「チャレンジ政策提言」**。
例えば「三方五湖を一周するサイクリングルート」整備であったり、県内の歴

次ページへ続く

前ページより続く

史的建造物を実際に活用して、展示会、ウエディング、写真撮影、イベント等を実施したりなど、ワクワクする8つの事業に予算が付きました。

ただ、事業化が決まった後は、効果を求められるあまりに予算が大幅に削られたり、発案した職員の配属課と事業を行う課が違う場合、不都合も生じたりもします。若手の独創的な発想が、より県政に反映されるように、この制度の課題とブラッシュアップ策をただしました。

若手職員による知事へのプレゼン
（6月23日　県庁）

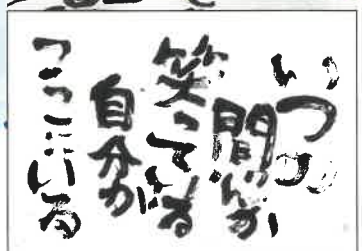
A 【知事】若手職員の考えた仕事に参加しやすいような制度を整えていき、また一生懸命頑張って事業化できた職員にはボーナスも上乗せするなどの制度も取り入れながら、モチベーションの向上や、政策立案能力の向上も狙っていきます。

★重度障がい者のグループホーム設立に向けて

重度な障がいを持つA子さん（30歳）。高志高1年生だった平成16年7月のバレー部練習中に、突然脳幹出血で倒れました。その後生死の境をさまよい、結果顔や目、指先がわずかに動く以外全身不随となりました。約1年半、医療機関で過ごしたのち、自宅でご両親による介護が始まりました。A子さんは生活のほぼ全てで介護が必要です。胃ろうの処置や痰の吸入も欠かせません。でも、わずかに動く指で、自分の意思を文字や絵に書くこともできます。晴れた日に車椅子での散歩も楽しみです。こうした豊かな生活は、ご両親の介護によって成り立っています。

ご両親はこう言います。「私たちが元気で生きているうちは、A子の介護ができる。**でも私たちが亡くなった後、A子は誰がみてくれるのだろう。病院のベットで1日中天井しか見ていないとなると、生きる意味が見つけられない**」。

こうした医療的ケアが必要な重度障がい者を子に持つ親として、グループホームの設立は悲願です。しかし、看護師などのスタッフの確保や医療的ケアの対応の難しさから、整備や受け入れは進んでいません。1日も早いグループホームの設立を訴えました。



お母さんと一緒に自分の思いを詩に書くA子さん
（出典「いっぽんのゆび」から）

A 【健康福祉部長】国では、看護師配置への加算制度が新設されましたが、まだまだ不十分です。今月の国への重点提案・要望で報酬加算の見直しを強く働きかけています。できるだけ早く、医療的ケアが必要な重度障がい者のグループホームが開設できるよう県としても支援していきます。

★里親委託の推進

虐待や家庭の事情で家庭での養育が困難になった子ども達は、これまで施設などでの社会的養護を受けてきました。しかし、平成28年に改正された児童福祉法では、そうした子ども達は「できるだけ家庭と同様の環境」で育てられることが望ましいとなりました。従って、施設で養育されていた子ども達も、これからは**優先的に里親での養育**が進められていきます。ただ、実親の同意を得るのが難しかったり、年長児の引き受け手が無かったりなど、なかなか思うように進みません。今年、新たに**里親を進めるためのフォスタリング（里親支援）機関「福さと」**ができました。これまでは児童相談所が担ってきた里親推進業務を切り離し、里親登録数の拡大や里親への支援、里親と子どもとのマッチングなど、よりきめ細かく里親を進めていく機関です。フォスタリング機関「福さと」への専門職員の増配置や財政支援を求めました。

里親制度普及イメージキャラクター
公募したネーミングの結果を近日発表予定

A **【健康福祉部長】** 次年度以降、里親家庭への相談体制の強化や、子どもと委託する家庭のマッチング業務など、里親の登録前から子どもの委託後まで一貫した体制による里親支援を行っていきます。そのため必要な職員の増員も必要なので、支援の拡充を検討していきます。

★ポストコロナに向けた観光促進策

杉本知事は、ワクチン接種を希望する全ての県民の接種を10月末までに終えるよう努力しますと述べました。ワクチンの普及とともに感染が終息に向かうと思われます。そうなれば、これまで非常に厳しい状況におかれた、様々な業種の立て直し策が必要となります。その一つに観光業が挙げられます。約1年半人流が止められた中で、県内の観光バス事業者やタクシーは大きな打撃を受けています。コロナの感染終息と相まって、人々の旅行機運も盛り上がってくることでしょう。この機を逃さず、県としても観光促進策を打ち出し、打撃を受けた県内のバス事業者などの支援をするべきと考えます。

A **【知事】** 最終的には感染の終息時期にならないと判断しにくいが、9月頃には北陸三県往来に限っている観光バスの補助金を何とか全国に広げたいと考えています。また、修学旅行を呼び込んでくるとか、大河ドラマ「晴天を衝け」にちなんだ団体ツアーを組むなど、首都圏をはじめとした大都市部の旅行代理店にも提案し、**県内の観光業、観光バスの経済的な波及効果**を狙っていきます。

産業常任委員会 （6月30日）

産業常任委員会にて

コロナ感染症拡大により打撃を受けた業種は多くありますが、その中で比較的目が向けられてこなかったのが、音楽やアートなど文化的な業界です。県は今回の議会で「福井のアート支援事業」として、これまで減少していた県民の芸術文化の発表機会を支援するため、文化ホールの無料開放やプロアーティストによる公演等の提供に99,354千円の予算をつけました。コロナ禍で発表の機会を奪われていた県内の多くの音楽・芸術活動をしっかり後押しするための意見を述べました。

★6月定例会、一般質問のYou Tube動画を是非ご覧ください！

フリー・トーク

7月1日の事。「昨日、学校で七夕のおかざりをしたよ」。子ども達の見守りや地域の様子を見ることを兼ねて、私は地元の小学校の朝の集団登校班について歩いていますが、ある集団登校班で、いつも楽しくお話をする小学1年生の女の子が、私に向かってこう話しかけてきました。「へーっ、どんなお願いごと書いたの?」という私の質問に、何か答えていましたが、周囲の音で良く聞こえませんでした。おそらく将来の夢や願い事を書いたのでしょう。いつもなら楽しい会話のはずですが、その時私は心からはそう思えませんでした。

6月28日千葉県八街市で、2名の児童の尊い命が奪われました。下校途中の低学年の列に飲酒運転のトラックが突っ込んだのです。他の児童も1名が意識不明の重体、2名が重症という大変痛ましい悲惨な事故でした。現場は見通しの良い直線道路。でもガードレールはもちろん、歩行用の白線も引いてありませんでした。その道の端を、おそらく子ども達は学校で、あるいは家庭で教えられたルールを守って1列になって下校していたのでしょう。もしかしたら、この子たちも、翌週に控えた七夕の準備にかかっていたのかも知れません。将来の夢や願い事もあったことでしょう。その夢や願い事も全て暴走車が奪っていってしまいました。

東京から福井県に来られて間もない県警本部長が、7月1日の議会常任委員会でこんなことを述べていました。「歩行者の数が少ないこともあると思うが、（福井県民は）交通の当事者を車中心に考えている節がある」。その通りだと思いました。私の地元はもちろん、県内の通学路においても危険箇所はたくさんあります。子ども達をはじめ、歩行者の命を守るため、危険箇所の整備に全力を尽くさなければと思います。と同時に、歩行者最優先というドライバーへの意識向上にも努めていかねばと痛感しました。

地元小学校の通学路

お困り、お悩みなどありましたら是非ご相談を！

渡辺大輔事務所

〒910-0067 福井市新田塚1-70-31

TEL.0776-50-2083 FAX.0776-50-2086

E-mail d-wat571@outlook.jp

http://watanabe-daisuke.info/

Facebook用

オフィシャルサイト